

コリント人への手紙第二6章 「狭い心に対する広い心」

1A 神のしもべの弁明 1-10

1B 神の恵みにある救い 1-2

2B 自分自身の推薦 3-10

1C 苦しみの中の忍耐 3-5

2C 純真さ 6-8

3C 悪評の中での好評 8-10

2A コリントの人たちの心 11-18

1B 愛に対する狭めた心 11-13

2B 主の住まわれる宮 14-18

1C 不信者と釣り合わぬくびき 14-16

2C 汚れからの離脱 16-18

本文

コリント人への第二の手紙 6 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、5 章までできました。今朝は、6 章を一節ずつ見ていきたいと思えます。パウロは、2 章から、ずっと自分たちが、主にある働き人であることを弁明している話を続けています。「推薦」という言葉が、鍵となる言葉です。コリントの人々は、パウロたちの福音宣教の働きによって救われた人々であり、推薦状を必要とするというのは、あまりにも滑稽な話です。けれども、コリントの人たちが、偽使徒、偽教師によって影響を受けて、パウロに対して心を閉ざしているという問題がありました。

信頼関係を築くというのは、とても労苦のともなうことです。そして壊れかけた信頼を回復するのは、もっと難しいと思えます。パウロは、信仰的に自分を父、彼らの子として捉えています。思春期の難しい時期に、父が息子あるいは娘に愛をもって近づこうとしても、近づけば近づくほど、遠ざかってしまうことがあります。ちょうど、そのような状況です。コリントの人たちにすれば、パウロたちが自分たちを支配しようとしている、責めていると思っていますが、実は自分自身の心が窮屈になっていて、それでパウロやテモテが心を開いて話していることを、そのように脅しているかのように見ていたのです。

タイの生命保険のCMがユーチューブにあがっています。口の利かないお父さんに、育てられている中高生の女の子は、お父さんが聾啞者なのでいじめられます。それでだんだん、心がすさんできます。彼女は、お父さんが恨めしくなります。ついに、リストカットをして自殺を計りました。発見したお父さんは必死になって、命を救ってくれるよう医者にすがります。彼は娘のために、大量の輸血を申し出ます。娘さんは一命を取りとめました。病室で隣に寝ているのはお父さんでした。

娘さんは、お父さんの愛をその時に知って、泣いています。¹こんなすれ違いです。愛すればそれだけ、心を窮屈にしていくコリントの人たちの姿です。

1A 神のしもべの弁明 1-10

1B 神の恵みにある救い 1-2

¹ 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。² 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。

6章は、5章からの続きです。パウロが、何をもって、「神とともに働く者」としたのでしょうか？「キリストにある神の和解」のことは委ねられている者として、です。神が、私たちの背きの罪を、キリストにあってかえってご自身に負わせて、私たちに和解してくださいました。神が、背きに対して私たちを処罰しなければいけないところを、ご自身をキリストにあって痛めつけました。キリストが罪人とみなされ、私たちがキリストにあって義人とみなされます。

けれども、コリントの人たちは、その神の和解を危うくしそうな立ち位置にいました。神の和解を心を広げて受け入れていれば、良いのです。そうすれば、パウロたちにも敵対するのではなく、主にある和解ができるはずで。ところが、今、その神の恵みに立っていません。偽使徒たちによって、影響を受けていて、パウロたちを悪く思っただけでなく、何よりも、神の恵みのゆえに、信仰によって救われたというところから外れてしまっていたのです。それでパウロは、「神の恵みを無駄に受けないようにしてください。」と言っています。

そして、イザヤの預言を引用して、「今は恵みの時、今は救いの日です」と言っています。イザヤは、キリストが来られることを40章以降に話しています。今までの罪や咎が赦され、慰めを受ける時代が来ることを預言しました。今が、その恵みの時であり、救いの日なのだと言います。イエス様が来られて、恵みによって救われる時代に私たちが生きているのに、それでも今までと同じく、昔と同じように、人々に根拠もなく疑ったり、不信になったり、敵対さえしていることはどういうことなのでしょう？ということです。残念なことに、教会の中でこれが起こります。何か、罪があったわけでもないのに、良く分からないことで妬み、怒り、裁き、相手を憎むことさえあります。世の中においてのことならば、仕方がないのですが、恵みによって救われている者たちがそれを行って、元も子もありません。それが、ここで言っている「恵みをむだにする」ということです。

2B 自分自身の推薦 3-10

1C 苦しみの中の忍耐 3-5

³ 私たちは、この務めがそしられないように、どんなことにおいても決してつまずきを与えず、^{4a} むし

¹ <https://youtu.be/WEe9Z0YagOA>

ろ、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しています。

パウロたちは、いわば真面目な働き人でした。自分たちに委ねられた務めのためには、あらゆる場面でつまずきを与えないことによって、自分たちが神のしもべであることを推薦しています。推薦状などいらず、彼らに生き様にそのことが表れています。日本に住んでいる、ある韓国の牧師さんが、興味深いことを話していました。日暮里駅の東口は、エスカレーターの幅が狭く、一列しかありません。日暮里駅の駅員さんは、その制服を着ている彼らは、必ず階段を使って上り下りしているのだそうです。そして自分の国、韓国において、ソウルから仁川国際空港に向かうバスで、客室乗務員、つまりステューワーズさんたちが、その制服を着ているのにも関わらず、一般の人たちと変わらない立ち振る舞いをしています。私も経験したことがあります。一度、機内から出ていくと、客さんに対する礼儀というか、立ち振る舞いがガラッと変わります。それで、キリストの使節として生きている私たちは、どちらなのか？ということ问います。キリストという制服を身に着けている自分は、人々につまずきを与えないように自分自身を推薦しているかどうか？ということですね。

^{4b} すなわち、苦難にも苦悩にも困難にも、⁵ むち打ちにも入獄にも騒乱にも、疲れ果てた時も眠れない時も食べられない時も、大いなる忍耐を働かせて、⁶ また、純潔と知識、寛容と親切、聖霊と偽りのない愛、⁷ 真理のことばと神の力により、また左右の手にある義の武器によって、^{8a} また、ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。

パウロたちが、どのように自分たちを推薦しているかという、三つの部分に分かれます。それが分かるのは、前置詞です。英語だと分かり易いので、英語を使いますが、4 節後半と 5 節は、in が使われています。つまり、「このような状況の中で」ということです。苦難においても、苦悩においても、むち打ちの中でも、入獄にも、騒乱にも、疲れ果てた時も、眠れない時も、食べられない時も、これらの時に、大いなる忍耐を働かせて推薦していたということなのです。

2C 純真さ 6-8

そして 6 節から 8 節前半は、by が付かれています。「～によって」ということです。このような状況にあっても、これらの動機によって私たちは、神のしもべとして推薦していたということなのです。これらの困難の中にありながら、忍耐して、純潔によって動いて行きました。パウロたちの特徴は、誠実さでした。みことばに混ぜ物をしたり、へつらうことはしませんでした。そして、知識によって動きました。純潔といっても、きちんと知識をもって、柔軟に賢く対応したということなのです。大人は、ただ優しいだけでなく、悪に対しては賢く動きますね。それから、寛容と親切によって動きましたということなのです。ここの寛容は、耐え忍ぶという意味合いですね、反対されたり、酷いことをされても耐え忍んで、親切にふるまいます。そして、聖霊と偽りの愛によって、動きました。聖霊によって、神の愛が心に注がれて、人々に良く思われたいというような偽りではなく、真実に愛していました。そし

て、真理のことばと神の力によって動きました。真理の言葉を語り、自分たちの雄弁さには頼らず、そしてみことばにある神の力に頼って行ったのです。そして、左右の手にある義の武器とっていますが、これは、具体的に手を動かす時に、正しいことを行ったということです。悪者や偽り者に対処する時に、復讐するのではなく、義を行っていった、これが私たちの武器である、ということです。

そして、8 節が興味深いですが、「ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりする」ということですね。同じことを行っても、それをそしりの対象とする者たちがいます。好評を博したりしても、悪評も受けます。事実、コリントの教会にいる偽使徒たちは、パウロのしていることが良いことなのに、それを、悪意をもって人々に対して批評していました。

3C 悪評の中での好評 8-10

^{8b} 私たちは人をだます者のように見えても、真実であり、⁹ 人に知られていないようでも、よく知られており、死にかけているようでも、見よ、生きており、懲らしめられているようでも、殺されておらず、¹⁰ 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。

ここが、三つ目の前置詞です。英語ですと as になります。「～として」ということです。困難な状況の中にあっても、純真さ、誠実をもって対応しました。その結果、悪評が出ているような中でも、実はそうではなく、むしろ良い実を結んでいるということです。パウロたちは、計画を変えてだましていると批判されていましたが、いや、真実でした。何か隠れてやっている、人に知られていないと言われていても、きちんと明白に話していました。知られています。それから、死にかけたことは何度となくありますが、見事に今、生きています。鞭打ちなど懲らしめられましたが、殺されていません。イエス様の復活のいのちが働いていますね。

そして、苦しみの中で悲しんでいるようで、いつも喜んでいました。それから、貧しく見えても、多くの人を富ませています。富んでいても、いつも貧しい、かつかつだという人もいますし、その逆で、非常につつましい生活をしているようで、周りの人々を富ませています。そして、何も持っていないように見えても、全てを持っています。私たちの昔の知り合いで、お金がなかった家庭ですが、自然を見て、景色を見て、「なんて、私たちは富んでいるんだろうね。」と言っていたのを思い出します。これらの自然が、天におられる自分たちの父が持っておられるものですから。

このように、真実の部分を見極める力のある人たちは霊的です。その逆で、人の目に見える、表面的なところしか見ない人々は、肉的です。人の目に見えるところしかみないのは、世の人たちと何ら変わらない見方をしているのですが、それには気づいていません。コリントの人たちが、そのような見方をしていました。私たちは互いを見る時に、真実な部分を見ているでしょうか？

2A コリントの人たちの心 11-18

1B 愛に対する狭めた心 11-13

¹¹ コリントの人たち、私たちはあなたがたに対して率直に話しました。私たちの心は広く開かれています。

これまでパウロは、自分の働きを弁明してきました。ここで終わります。これからは、受け手であるコリントの人たちに対する問いかけです。自分たちは、率直に語り、心が広く開かれていますと言っています。これは、へりくだりがないとできないことです。自分に与えられている務めについて、それがたとえ正統なものだとしても、誰かに責められたり、攻撃されたりするならば、むしろ心を閉ざして、心に砦を設けて話していくものです。しかし、パウロはコリントの人たちの愛ゆえに、彼らを信頼し、このように自分自身を危うくすることも省みずに、広く心を開きました。心を広げるのは、難しいことですね。そこには、パウロたちにあるような忍耐深い愛が必要です。

¹² あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。¹³ 私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。

これが、冒頭でお話したことです。パウロたちは愛の心で接しているのですが、それを彼らは、自分たちに迫ってきている、脅してきているというように見ていました。けれども、それは思い過ごしで、むしろ彼らの心のほうが狭くなっているからそうなっているのです。例えば、パウロたちは人をだましているというように、コリントの人たちは見ましたが、このことについてパウロは1章23-24節で弁明していました。計画を変更しているのではなく、彼らのことを配慮して、自分たちで自立した信仰で決断ができるように待っていたということを話しています。パウロの、こうしたきめ細かい配慮を、早まって判断して、心を彼に対して堅くしていたのです。ですから、まるで思春期の子が親に反抗するみたいに動いていました。しかし、心を開いて、実際のことを見ていくようにしなさい、と促しているのです。

2B 主の住まわれる宮 14-18

どうして、彼らがそのように心を狭くしてしまったのでしょうか？霊的にまだ子供だからです。彼ら、不信者の人たちと歩調を合わせようとしていたからです。

1C 不信者と釣り合わぬくびき 14-16

¹⁴ 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。¹⁵ キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。

コリントの人たちは、第一の手紙にあったように、世の知恵に頼っていました。イエス・キリストを信じたのですが、ギリシア文化や哲学の中にある考えから脱却できていませんでした。彼らによって、寛容であるというのは、いろいろな考えを受け入れることでした。自由というのは、いろんなことをやっても、それを許容することでした。それは今の考え方にも通じますね。寛容であり、自由であることが、いかにもキリスト的であるかのようにふるまう人々がいます。罪を罪とすることは、いかに偏狭で、狭い心を持っているかと責めてきます。コリントの人たちは、不信者の人たちの考えと融合させて、それで信仰を捉えていくことが良いこととみなしていました。しかし、むしろ世の考えを取り入れることで、心が狭くなっていたのです。矛盾しているように聞こえますが、キリストのみだからこそ、この方の愛の広さ、深さ、高さ、長さを知り、真実な意味での寛容があるのです。

確かに、一見、イエス・キリストの福音は、偏狭に見えます。イエスご自身が、狭い門から入りなさいと言われました。しかし、イエスの御名こそ人に人を救う力があり、神が全ての人に慈悲深いように、人が自分のことしか見られない狭い心を変えていただき、広い心に変えられるのです。イエスのうちに、すべての知恵と知識の宝があるのですから、この方のうちに生きていく時にこそ、あらゆる人に救いを与える福音をもって、人々に接することができるのです。

キリストとの純真な結びつきがあるからこそ、キリストの心を抱くことができます。ですから、不信者と、釣り合わない頸木を共にしてはいけません。牛が同じ頸木をもって土を耕すのですが、釣り合わなかったら耕すことができません。また、正義と不法にも関わりはありません。光と闇もそうです。そして、キリストとベリアルとありますが、ベリアルは悪魔のことです。そこには調和がなく、不信者は世の支配にあり、信者はキリストの支配にあります。ここで大事なことは、共にいてはいけないということではありません。イエス様は、取税人や遊女と共におられました。けれども、彼らのしている罪には関わりませんでした。ご自身の光によって彼らに影響を与えましたが、彼らにある罪がイエス様に影響を与えることはなかったのです。これが「関わりはない」ということです。

^{16a} 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。

私たちは、5章における学びで、自分たちのからだは幕屋や建物に喩えられているのを見ました。また、コリント第一において、「3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」とあります。あなたがたは、神の住まわれる宮なのだ、御霊がおられるので、あなたがたが神の宮なのだと教えていました。

2C 汚れからの離脱 16-18

^{16b} 神がこう言われるとおります。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

これは、レビ記 26 章 12 節からの引用です。イスラエルの民が約束に住んで、祝福されることが約束されています。それは、主ご自身が彼らの間に住んで、歩んでくださるからです。このような、主ご自身が真ん中におられることが大事です。まさにこれが、私たちが神の宮なのだということです。主がともにおられます。そして、そのことによって、神と個人的な関係を持ちます。神を、私たちの神とすることができます。また、神は、彼らのことをご自身の民とすることができます。イエス・キリストにあって、私たちも神が私たちの神であり、私たちは神の民なのです。

17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。——主は言われる—— 汚れたものに触れてはならない。そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、¹⁸ わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる。——全能の主は言われる。」

17 節はイザヤ書 52 章 11 節からです。「去れ、去れ。そこから出て行け。汚れたものに触れてはならない。その中から出て行き、身を清めよ。【主】の器を運ぶ者たちよ。」イスラエルの民が、バビロンに捕え移されたけれども、主がバビロンを滅ぼし、彼らが帰還できるようにされたというのが背景にあります。そして、バビロンに長らく住んでいたけれども、その汚れにも慣れ親しんでいたけれども、けれども今は、解放されたのだから、そういったものから離れなさい、離脱しなさいという呼びかけです。シオンに、良い知らせがあるのだから(52:7)ということを行っています。

こうやって世にあるものから離脱することによって、初めて 18 節にあるように、主が父として、自分たちが息子、娘としての親しい交わりができるのだと言っています。この 18 節は、イザヤ 43 章 6 節から来ているもので、世界に離散しているイスラエルの民が、そこから呼ばれて帰還する時に、「わたしの息子たちを遠くから来させ、娘たちを地の果てから来させよ。」と呼びかけているのです。

このように、世にあるものへの執着から、相いれないのに世との融合、交わりをしながら信仰生活を送れば、そこには狭い心しか生まれません。しかし、そこから離れることは、恐れや勇気がいるでしょう。けれども、離れたら、恵みがあります。神が父として受け入れられるという恵みです。息子また娘として交わりができるという恵みです。パウロたちと同じように、誠実さ、純潔を大切にしましょう。自分のちっぽけな頭で、良かれと思って行うのではなく、主が良いとしておられること、正しいとしておられることを、素直に受け入れましょう。世から離れても、必ずそれを補い、ありあまるほどの、親しい交わりが用意されています。

そのことによって初めて、横の関係、信者同士の信頼関係と交わりも確かになっていきます。自分の悟りに頼らない、主のみに従っていきましょう。